

## ハイデガーの時空間における枠組みとしての〈物〉

霜山 博也

ジル・ドゥルーズが、ハイデガーについて直接的に述べることは少なかったが、唯一直接的に触れた「ハイデガーの知られざる先駆者、アルフレッド・ジャリ」というテキストがある。そこでドゥルーズは、後期ハイデガーの重要概念である「四方域（大地，天，神的なものたち，死すべき者ども）」を枠組みとして規定している。本稿は、このドゥルーズの規定をヒントに後期ハイデガーのテキストを主に扱いながら<sup>1</sup>、大地，天，神的なものたち，死すべき者どもの関係性を枠組みづける〈物〉によって、どのように「時-空（ある瞬間と状況）」において生起，すなわち出来事としての存在の真理が開示されるのかを明らかにする。

### 1. 存在の襲

まず、前期ハイデガーが時間と空間、あるいは物についてどのように考えていたかを見てみよう。ハイデガーは、「存在[Sein]」と「存在者[Seiendes]」を区別し、他の事物的存在者と違って、人間である「現存在[Dasein]」は特権的な存在者であり、みずからの存在を問うことができるとする。普段は、非本来的な日常世界に入り込み「頹落[Verfallen]」しているが、死を先駆的に覚悟することによって、本来的瞬間において実存の本来性を獲得するのである。ハイデガーにとって時間は、存在了解の構造であり、「到来 - 既在性 - 現在」という本来的時間性と、「予期 - 忘却 - 現成化」という非本来的時間性に区別される。「現存在」は、「世界内存在[in-der-Welt-sein]」（「世界」においてあらかじめ実存している）として、存在そのものが開示される可能性を持っている場であり、いかに非本来的な自己の外へと抜け出し存在を了解するかという、「脱自」が問題となる。ハイデガーは存在を直接的に問うことや、存在者から存在を問うことも

しないのであり、現存在は存在の真理が開示される場なのだ。ハイデガーは、存在了解の構造を分析することによって、いわば折り畳まれるように存在の真理は現存在において生起してくることを明らかにする（したがって、個々人の実存は実はあまり問題とはされていない）。

それに対して、空間のほうは道具分析において明らかになる。道具とは「配慮的な気遣い[Besorgen]」のうちで出会われる存在者のことである。道具は、そのつどの配慮的な気遣いにおいて、「～のために」用いられるのであって、配慮的な気遣いが変わればその道具の用い方も変化する。また、道具は他のものとの関係性（道具連関）においてこそあるのであり、例えば、野球という配慮的な気遣いにおいて、バットはボールを打つためにあり、バットはグローブやスパイクなどとの関係性においてある。しかしながら、敵から身を守るという配慮的な気遣いにおいては、バットは武器となり、鍋のふたなどの盾となるものとの関係性においてある。この場合、野球という配慮的な気遣いにおいて、グローブやスパイクは現存在にとって《近い》が、敵から身を守るという配慮的な気遣いにおいては、鍋のふたが《近い》のであり、グローブやスパイクは《遠い》。そのつどの目的を持った配慮的な気遣いに応じて、それぞれの道具の関係性は変化するものであり、現存在にとっての《近さ》や《遠さ》も変化するのだ。

配慮的な気遣いの変化によって遠ざかりは奪取され、さまざまな道具がこれまでとはことなった関係性に置かれる。ハイデガーにとっての距離とは、現存在の配慮的な気遣いによる目的にとっての《近さ》や《遠さ》であり、質的な意味や価値を持ったものである。したがって、客観的あるいは科学的な距離とは何の関係もない。この《近さ》や《遠さ》は、そのつどの目的に応じて多様な仕方に変化するものであり、ハイデガーの空間は質的に変容する空間なのである<sup>2</sup>。配慮的な気遣いによって用いられる道具は「道具的存在者[Zuhandenheit]」と呼ばれ、それらの関係性によって自然のあり方はそのつど暴露される。また、現存在との関係に置かれておらず、それ自体においてある物は「事物的存在者[Vorhandenheit]」と呼ばれる。配慮的な気遣いによって、物は「道具的存在者」となり他の道具との関係性に置かれ、ある質的な意味や価値を持った空間が生成する。しかしながら、これはある一つの物の物性と自然のあり方の暴露にすぎない。つまり、いかに配慮的な気遣いに変化しようとも物の物性と、自然そ

ものは暴露されないので。また、空間そのものも配慮的な気遣いが多様にある以上は、明らかにされることはないであろう。物が明らかにするのは、「世界」のある一つのあり方にすぎないので（「世界」そのものは、全ての存在者に先立って超え出ているのであり、その開示の場は開かれている）。

前期ハイデガーにおいては、配慮的な気遣いが日常的な非本来性にあるので、空間は時間に従属している。存在了解の時間構造が問題となっているので時間が優位であり、いかに空間が生成してくるのかは「予期 - 忘却 - 現成化」という非本来的時間性の構造に依存する。さらにそこから、本来的時間性へと「脱自」しなければならないのである。ところで、存在者が自らの実存在を了解する、その時間的な構造を分析することによってハイデガーが問題としているのは、存在と存在者の「差異[Differenz]」が生成する「《あいだ》[das 《Zwischen》]」である。それは、存在／存在者や世界／物という図式において、《／》によって表現されるものであり、これが「二重襞[Zweifalt]」と呼ばれる。存在や世界の開示の場は可能性として現存在に開かれており、そこから多様な仕方で真理が開示される。存在の真理は、そのつどある一つの存在者ではないものとして、ある一つの仕方で開示される。存在の真理は、存在と存在者の二つの側面から折り畳まれるようにして、ある一つの存在者から明らかにされ、そして、そのようなものではないものとして、明るみに出されるとともに隠されるという二重の運動から生じるのだ。

しかしながら、ハイデガーは後期になるとさらに、存在者や対象から「存在」そのものを思索することを徹底的に拒否するようになる。存在と存在者の存在論的差異そのものを乗り越えようとするのである。「詩作[Dichten]」と「思索[Denken]」の「共属[Zusammengehören]」の場において、「現前するもの[Anwesendes]」と「現前すること[Anwesenheit]」の「一重襞[einfältig]」が問題となる。そこで導入されるのが、「四方域[das Geviert]」という概念であり、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性から思索することである。大地、天、神的なものたち、死すべき者どもは互いに依存関係にあり、一つの項は他の三つの項なしにはありえない。他の三つの項があるからこそ一つの項が成立するのであって、四つの項は互いの関係性を内に折り畳んでいる。いわば、《四重の襞》といえるだろう。さらに、人間はただたんに死すべき者どもと

呼ばれ、何ら特権的な位置を占めることはない。これら四つの項の関係性が変化する場が現存在であり、変化するたびに関係性は枠づけられるのである。存在そのものを直接的に問うのでも、存在者から問うのでもなく、四つの項の関係性から存在を問うのである。それでは、いかにして「現前するもの」と「現前すること」が一致するのであろうか。

## 2. 同一性と相等性

ハイデガーは『同一性と差異性』において、最上位の思考法則であるとされる、同一性の命題  $A=A$  について語っている。この同一性の命題である  $A=A$  の型式については、二通りの解釈が考えられる。つまり一方では、ある一つの  $A$  がある一つの他の  $A$  と等しい、 $A$  と  $A$  とが相等しいことである「相等性[Gleichheit<sup>3</sup>』と考えることができる。相等性が意味しているのは、ある一つの物があったとして、その物とそれを対象としてとらえる主観の表象作用が等しいということ。あるいは、ある一つの物を制作しようとしている存在者がいるとして、制作者の持つ物の理念と制作された物が等しいということである。しかし、それは物そのもの、あるいは物が持つその物性について本当に思考しているのであろうか。例えば、ハイデガーは〈物<sup>4</sup>〉について論じた、いわゆる「物講演」において、西洋の伝統的な物の把握の仕方を批判している。

近代的な思考とは物に対して「表象[Vorstellen<sup>5</sup>』を用いて思考すること、物を主観の表象作用に対する「対象[Gegenstand<sup>6</sup>』としてとらえることである。そして、古代的な物の把握の仕方は、「制作すること[Herstellen<sup>7</sup>』、作り出して立てることであり、物はそもそも制作する人間を前提としている。また、その制作する行為について言えば、先に制作される物の理念が存在していて、その理念を実現するために制作するのであって、物は他のものに完全に依存している。それに対して、ハイデガーは〈物〉をそれ自身において立っている「自立的なもの[Selbständiges<sup>8</sup>』としている。物をそれだけで独立に思考して、論じなければならぬのであり、それを対象ととらえる主観の表象作用や、制作者の行為や制作者の持つ理念に依存してはいけないのである。同一性の命題  $A=A$  を、ある一つの  $A$  がある一つの他の  $A$  と等しいと解釈することは、対象の同一

性を何か他のものによって保証すること、あるいは、対象の同一性を他のものが代わりに語ることを意味する<sup>9</sup>。

したがって、同一性の命題  $A=A$  のもう一方の解釈は、「何かと同じもの[*das Selbe*]でありうるためには、常に一つのもので充分<sup>10</sup>」であり、それぞれの  $A$  がそれ自らと同じものであることを意味していると考えられる。ある一つの  $A$  がある一つの他の  $A$  と等しいというように、二つのものがあってそれらが等しいというのではなくて、それらがそもそも同じものを意味しているのである。それは等しいことを示すような、いかなる媒介や総合もなしに、〈物〉がそれ自らで存在していることを思考することを意味する。言い換えれば、対象を他のものが代わりに語るのではなく、むしろ語らせるのである。われわれは物の性質について、それを対象とすることで「これは～である」などとして語ることができる。しかしそれは、われわれから見た物の性質であって、〈物〉という「自立的なもの」の存在を語っているわけではない。しかしながら、物がわれわれには知覚できない性質を含んでいることを指摘しても、それほど意味があるわけでもない。むしろ、対象の同一性は、主体や客体（主観と対象）といったもので語られるのではない<sup>11</sup>。

後期ハイデガーは存在論的差異そのものを乗り越えるために、「現前するもの」と「現前すること」を一致させようとする。「現前するもの」は、近代的な「表象」であれ、古代的な「制作すること」であれ、主体的なものにとって「現前するもの」である。存在論的差異を乗り越えるためには、徹底的に存在者や対象から思索することをやめなければならないのであり、そのために「四方域」という概念、関係性から思索することが導入されたのであった。これら四つの項の関係性が変化するたびに、その関係性は枠づけられる。人間はただだんに死すべき者どもなのであって、ある枠づけられた四つの項の関係性が固定化されて、そこから思考されたのが《人間》であり《対象》である。《人間》や《対象》と言うならば、それは「表象」という枠組みを固定化して思考しているのであり、《イデア》や《形相》などと言うならば、それは「制作すること」という枠組みを固定化して思考しているのだ。

「技術への問い」においてハイデガーは、自然に対して働きかけ「用立てる[*Bestellen*]

るとする。そして、それは「用象[Bestand]」と呼ばれる<sup>12</sup>。例えば、近代的な思考は「表象[Vor-stellen]」、古代的な思考は、「制作すること[Her-stellen]」である。その他にも、「技術への問い」においては、「~stellen」という単語が頻出しており、それらすべてが大地、天、神的なものたち、死すべき者どものある枠づけられた関係性を表している。これら四つの項の関係性が変化し、枠づけられるたびに、思考の仕方が生成するのだ。したがって、四つの項の関係性が変化するたびに、思考の枠組みが生成するのだから、通時的にも共時的にも無数の思考の枠組みがあったことになる。「制作すること[Her-stellen]」は人類の思考の始まりではないし、「表象[Vor-stellen]」が人間の思考の仕方の中心になる理由はどこにもない。それぞれの「~stellen」が、新たな「根源[Anfang]」なのであって、単線的に存在の歴史を思考し、地球上の一つの場所を中心にする理由も全くないのである。こうして、後期ハイデガーの哲学はある種の地理哲学となる。思考の枠組みの生成は、別の「根源」への移行であって、どの思考の枠組みも中心にはなりえないのだ。

「現前すること」はこの枠組みにおいて生じている出来事であって、この枠組みを固定化してしまい、その枠組みを中心にして思考を始めるときに、「現前するもの」が生じるのである。したがって、「現前するもの」と「現前すること」は、四つの項の関係性が変化し、思考の枠組みが生成する時には一致している。同一性の命題  $A=A$  は、その時その場所にある四つの項の関係性を現わす出来事として、思考がそこに生じていることを意味する。同一性の命題  $A=A$  は、「思考と存在との同一性[Selbigkeit]」を意味するのであって、思考そのものがある関係性を現わす出来事となり、思考そのものが出来事である差異として現象するのだ<sup>13</sup>。ハイデガーは、これを「生起[Er-eignis]」と呼んでいる。

いかなる存在者よりも存在者的であるのは、存在それ自体である。最も存在者的なものは、もはや「ある」のではなく、「本質現成[Wesen]」する働き（生起）として本質現成する。存在は生起として本質現成する<sup>14</sup>。

存在そのものを直接的に問うこと、あるいは存在者から存在を問うことは、ある思考の枠組みから存在を問うことになってしまう。それは、その思考の枠組

みにおいて「現前するもの」となってしまうのである。四つの項の関係性から存在を問う時に始めて、「現前すること」が出来事として生じる。存在はある「~stellen」において、そこに固有の仕方からその本質を現成する。

大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性が変化した、まさにその瞬間的な場（一重襲）から、存在と存在者の二重襲という（ある一つの存在者ではないものという）差異化の運動が生じる。出来事が生じたその瞬間的な場において、「存在と存在者との『同時性[Gleichzeitigkeit]』<sup>15</sup>」が成立するのだ。ハイデガーにとって同時とは、複数の存在者が同じ均質的な空間に一緒にいることではない。存在と存在者との差異化の成立が同時であって、そこで枠づけられた四つの項の関係性は、存在の真理をある仕方から開示するとともに、「世界」をもまたある仕方から開示する（枠づけの機能である〈物〉が、ある一つの「世界[Welt]」）。共時的には、「~stellen」という思考の枠組みが地球上にいくつもあるのだが、それらは全て新たな「根源」であって、それぞれの仕方から「世界」を開示するのである。多様な「世界」が地球上で共存していると言えるだろう。しかしながら、ある枠づけられた四つの項の関係性を固定化することは、そこを中心として存在者や対象から存在を思索してしまう。存在と存在者との同時的な差異化の成立に対して、別の「根源」にあるものを付け加えることになってしまう。ある一つの「根源」にすぎないものが、中心となってしまうのだ。

### 3. 時空間の枠組み

ドゥルーズは「四方域（大地、天、神的なものたち、死すべき者ども）」を枠組みとして規定している<sup>16</sup>。〈物〉は「存在と存在者との『同時性』」という瞬間的な場において、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性を枠づける<sup>17</sup>。これらの四つの項は、互いを必要としているのであって、四つの項のいずれもが他の三つの項なしに考えることができない。例えば、「物講演」における「瓶」の例を見てみよう。「瓶」にワインが注がれるとしよう。ワインは肥沃な大地と恵まれた天候によってこそ作られるのであり、大地と天は必ず互いを必要としている。そのワインが「瓶」に注がれた時に、死すべき者ども

である人々にとっての、宗教的儀式や文化的なお祝い事（神的なものたち）が生じる。死すべき者どもは、必ず宗教や伝統・文化との関係のうちであり、そこから独立し人間が存在していると考えられてしまうのは、やはりある一つの思考の枠組みから考えてしまっているからである。この大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性は、〈物〉である「瓶」にワインを注がれた時に生じたのであって、あらかじめある関係性の中に「瓶」が置かれているのではない。もし〈物〉である「瓶」に日本酒が注がれたならば、全くことなった大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性が生じてくるであろう。

《人間》が《対象》として物を用いるのではなくて、「瓶」という〈物〉に何か注がれたときに、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性が生じるのであって、そこにあるのは動詞的な活動である。繰り返すが、誰かがある目的のために何かを用いるのではない。「瓶」という〈物〉に、水、コーヒー、紅茶、ビール、紹興酒、ウオッカ…を注げば、それぞれ全くことなった大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性が生じる（これが出来事である）。同じワインでも、時と場所が違えば、やはり全くことなった関係性が生じることになる。こうして、〈物〉においてこそ、さまざまなものが生きる大地、天候の変化である天、宗教や伝統・文化を司る神的なものたち、人間である死すべき者どもが、ある瞬間的な場での固有の関係性において結びつけられる<sup>18</sup>。大地、天、神的なものたち、死すべき者どもが、そのどれか一つから、あるいはそのどれか一つに基づいて思考されると、純粋な関係性そのものは生じてこない。

さらに別の例を見てみよう。ハイデガーがあげる例は一本の橋である。橋は、さまざまなものが生きる大地、天候の変化である天、宗教や伝統・文化を司る神的なものたち、人間である死すべき者どもを多様な仕方で結びつけるのであって、ただ単にすでにあった兩岸を結びつけるだけではないのだ。さまざまな生き物が渡れるように大地と大地を結びつけ、人々を行き来させる。橋ができることによって、天候の変化に対して克服する手段が与えられる。あるいは、橋ができることによって、人々の移動の仕方や経済活動にも影響が生じ、文化や宗教的なものにも変化が生じるであろう。



橋とはむしろ、固有の仕方である。というのも橋は、四方域を、「ありか[Stätte]」を容認する[verstattet]、という仕方であるから。しかし、自らが「場所[Ort]」であるようなものだけが、ありかを明け渡す[einräumen [=圏域 Raum を委ねる]]ことができる。この場所は、橋以前に既にあるのではない。たしかに橋が立つ以前にも、流れに沿って、何かによって占有されることができそうな多くの地点[Stellen]がある。それらのうちの一つが、一つの場所として生じ、それはしかも橋によってそうなるのである。このように橋とは、まずある場所があって、しかしそこに立てられるべきものではなく、むしろ橋自らに発して、ようやく場所が生じる。橋は物であり、四方域を集わしめるのだが、とはいえそれは、四方域にあるありかを容認する、という仕方である。このありかから、さまざまな広場や道が定められ、それらを介してある「圏域[Raum]」が明け渡される。(中略) 圏域とは、本質からして明け渡されたもの、その境の中へと立ち入りを許されたもの、である。明け渡されたものは、その都度許しを得て[gestattet]、かくして結び繋がる[gefügt]、とはつまり、ある場所によって、すなわち橋というあり方の物によって集わしめられるのである。これに従うなら、さまざまな圏域は自らの本質をそれぞれの場所から迎え入れる[empfangen]のであり、「空間」なるものから[aus “dem” Raum]迎え入れるのではない<sup>19</sup>。

橋とは一つの「場所」であって、橋が建てられるたびごとに、さまざまなものが生きる大地、天候の変化である天、宗教や伝統・文化を司る神的なものたち、人間である死すべき子どもが新たに多様な仕方結びつけられる。「場所」とはこれまで述べてきた、瞬間的な場において出来事として生じてきた、そこに固有な仕方である関係性のことである。その「場所」においては、大地、天、神的なものたち、死すべき子どもについての、その「場所」に固有の関係性が枠づけられており、この関係性によって人々は対岸へと渡って交流する。この「場所」によってこそ、ある「圏域」が可能になる。例えば、橋が新たに建てられることで、道や広場がいままでなかった仕方結びつけられる。橋ができる以前、川の向こう岸は、物理的には近くても、川があることで断絶されており、心理的にはとても遠かった。しかしながら、橋が建てられたことで、心理的に

もとても近いものになる。向こう岸の人々との交流が始まり、広場において新たな仕方で会話や売買がなされるようになる。橋ができることによって、普段使う道も変わるのであって、いままでよく行っていた場所には行かなくなる。それによって、いままで心理的には近かった場所やそこで会っていた人が、こんどは遠く感じられるのだ。

「場所」によって可能となる「圏域」においては、質的な意味や価値によって《近さ》や《遠さ》が考えられている。橋が建てられることによって、向こう岸の方が《近い》と感じられるのは、橋という「場所」が新たな関係性を生じさせたからにはほかならない。橋だけではなく、さまざまな〈物〉が建てられて「場所」となるたびごとに、そこに枠づけられた関係性も変化するので、《近さ》や《遠さ》も感じられて把握される質的な意味や価値として変化するのだ。「圏域とは人間に相対するものではない。圏域とは外的対象でも内的経験でもない。人間があり、さらにその他に圏域がある、のではない<sup>20</sup>。」「人間」と名指すこと、それはかつてあった大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの枠組みにおける関係性を固定化して思考してしまうのだ。われわれは「人間」と名指される前に、死すべき者どもなのであり、死すべき者どもは質的な意味や価値の変化を経験する。人間存在の十全な姿は現前しないのであって、われわれはただ生成してきた（大地、天、神的なものたち、死すべき者ども）枠組みにおいて多様な質と意味の変化を経験するにすぎない。質と意味の変化は、〈物〉が建てられることによって生じるのであり、われわれはその枠組みのなかで、そこで生じた出来事そのものである思考として現象する。

橋という「場所」は、瞬時的な場でありそこから「圏域」が生じてくる。「圏域」における《近さ》や《遠さ》を、高さ、幅、深さによる単なる広がり、延長として考えることもできる。「延長」と名指すこと、それはかつてあった大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの枠組みにおける関係性を固定化して思考してしまうことである。あるいは、「圏域」を別の数学や物理学の考え方にしたがってとらえることも可能である。それでも、その数学や物理学はいつ名指されたのか、それはどのような枠組みの関係性から生じたのか、と問うことは可能である<sup>21</sup>。

空間は時間と根本的に異なっている。空間が、一緒に共同で存在しているものの [das Mitzusammenvorhandene] の秩序[ordo]および枠組み領野として、特定の観点で表象されるということは、このように表象された空間が、ある現在化（特定の瞬間性）において表象-定立されうるようになる、ということを示す。しかしながらこのことは、空間それ自体が何であるかについて全く何ごととも言っていない。空間を「時間」へ還元する理由は存しない。なぜなら空間の表象-定立は、ある時熟だからである。むしろ両者は、普通に考えられている「次元」の数においてのみ異なっているのではなくて、根本から最も固有の本質を持つものであり、この極限的な相違によってのみ、両者はそれらの根源すなわち時-空へ、戻るように指し示すのである<sup>22</sup>。

ハイデガーは、通常の空間や時間よりも根源的であり、そこから通常の空間や時間が発現するものを「時-空[Zeit-Raum<sup>23</sup>]」と呼んでいる。たしかに、空間を共存の秩序としてとらえて特定の観点で表象することもできる。表象された空間は、ある現在化（特定の瞬間性）において表象を用いて定立される。それは、空間をある特定の現在において考えることでしかない。

「存在と存在者との『同時性』という瞬間的な場（ある瞬間と状況）において、出来事は生じるのであり、それによって〈物〉は、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもについての関係性の枠づけとして機能する。「時-空は瞬間-場として、生起の転回から<sup>24</sup>」生じるのであり、その瞬間-場は表象によってとらえられるような「特定の瞬間性」ではない。「同時」なのは、存在と存在者の二重襲における差異化の運動であり、それは瞬間-場における関係性において出来事として生じる。しかしながら、ある一つの思考の枠組みを固定化することで、それを後から表象を用いてとらえると時間と空間になってしまう。そして、空間は時間に従属してしまうのだ。ある時空間のあり方、それらが持つ質的な意味や価値は、ある固有の関係性の枠組みから生じてきたのであり、「時-空」そのものは完全には現前しない<sup>25</sup>。

〈物〉は、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもについての関係性の枠づけとして、ある瞬間的な場において機能する。さまざまなものが生きる大地、天候の変化である天、宗教や伝統・文化を司る神的なものたち、人間である

死すべき者どもが、ある瞬間的な場で生じた関係性において結びつけられる。〈物〉は機能した時に「場所」となるのであり、そこからある質的な意味や価値を持つ「圏域」が生じてくる。「圏域」は自らの本質を、時-空（ある瞬間と状況）における枠組みである〈物〉が生じさせる、それぞれの「場所」から由来させるのだ。したがって、「圏域」の性質や特徴を表象によって名指しても、それはある一つの思考の枠組みを固定化させることにすぎない。しかしながら、これらのことが意味するのは、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもについての関係性の枠づけが、別の仕方でも機能して、新たな思考の枠組みを生じさせるのを待つしかないということである。さまざまな「根源」が示す多様な「世界」が、地球上で共存していることを、ただ冷静に省察していればよいのであろうか。しかしながら、ハイデガーはそこにはとどまらないのであり、〈物〉や「技術」の問題から、芸術へと向かっていくのである。

#### 4. 十字抹消された芸術

ハイデガーがサイバネティックス的な自動制御や情報といった考え方を徹底的に批判したのは、それがあつた一つの「根源」にすぎないにもかかわらず、現代的思考の中心になってしまったからである。「人間と存在とが、交互的に働きかけ合うように、相互的に関わり-置く [zu-stellt] ところの要求に対する名称が「集-立 [Ge-stell]」と言われる<sup>26)</sup>のであり、集-立のあり方は、時代によってそれぞれ異なつた存在者と存在の「布置 [Konstellation]」を与える。〈物〉は、さまざまなものが生きる大地、天候の変化である天、宗教や伝統・文化を司る神的なものたち、人間である死すべき者どもの関係性の枠づけとして機能する。それによって生成してきたのが、あつた一つの「~stellen」であり、それはあつた思考の仕方を表している。山と山を収集するものは山脈と呼ばれ、さまざまな気分を収集するものは心情と呼ばれ、自然をある固有の仕方から用立てる「~stellen」を収集するものは、「集-立 [Ge-stell]」と呼ばれる<sup>27)</sup>。

ハイデガーは技術を批判したのではなくて、われわれと技術との結びつき方、「布置」が一つしかないことを批判したのである。ハイデガーは、「命運 [Geschick]」と「宿命 [Verhängnis]」を区別するのであり、あつた一つの「集-

立[Ge-stell]」は固有な仕方での自然の用立て方を「命運」としてもたらず、別にそれは悪いことではないし、むしろ、新たな仕方での思考の枠組みをもたらすのである。それに対して、それを「宿命」と考えてしまうことは、「隷属する者[Höriger]」になることである<sup>28</sup>。サイバネティックスは、今までの枠組みではなかったような特異な仕方、その枠組みの固定化をしてしまう。われわれは不可避免的にこの唯一の枠組みに巻き込まれてしまうのだ。

自然が、計算により確定可能ななんらかのしかたでそれ自体を告げ知らせ、そして情報のシステムとして用立て可能なものでありつづけること。その場合、このようなシステムは、さらにもういちど変更された因果性から規定される。この因果性は、いまや、生み出しつつ誘発するという性格も、動力因あるいは形相因というあり方さえも示さない。おそらくこの因果性は、同時にあるいは相前後して確保されるべき諸用象についての挑発された報告〔すなわち情報〕へ収約するのである<sup>29</sup>。

サイバネティックスによっては、生物と機械とのあいだの区別はなくなり、情報という無差別な事象へと中性化されてしまう。もはや、あるのは何らかの目的に向かってフィードバック機構で修正していくというプロセスのみであり、存在者は科学的・技術的世界に閉じ込められることになる。全てがフィードバック機構というプロセスに還元されるならば、それは完全に一つの枠組みを固定化することであり、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもについての関係性は質料的なものという観点からしか考えられなくなってしまふ。

これに対抗するために、ハイデガーは、職人や芸術家の創造行為と自然そのものの創造行為を区別したうえで、それらが可能になる領域を表現しようとしている「傾聴する者[Hörender]」を見い出そうとする。

〈こちらへと・前へと・もたらずこと[Her-vor-bringen]〉、すなわちポイエーシスは、手仕事の製作だけではなく、また芸術的・詩的に〈輝きに・もたらし、形象へと・もたらずこと[zum-Scheinen-und ins-Bild-Bringen]〉だけでもない。ピュシス〔φύσις (自然)〕、すなわち〈それ自体・から・立ち現れてく

ること〔das von-sich-her Aufgehen〕も、一種の〈こちらへと - 前へと - もたらすこと〉であり、ポイエシスなのである。ピュシスはそれどころか最高の意味でポイエシスである<sup>30</sup>。

職人と芸術家は、たしかにポイエシス〈こちらへと - 前へと - もたらすこと〉をするが、それは別のものである。作品を通じてそれをなすのである。それに対して、ピュシスはそれ自体においてポイエシスをなす。ハイデガーが問題にするのは、職人や芸術家によって可能になる芸術よりも、ピュシスそれ自体によって可能になるような芸術である。現代の産業社会においては、芸術ですら情報のフィードバックにおいて制御されてしまうならば、職人や芸術家の創造行為ですら、ある一つの枠組みにおいてコントロールされたものになってしまう<sup>31</sup>。それでは、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもについての関係性の枠づけとして機能する、〈物〉は生成しないだろう。

ハイデガーにとって、「傾聴する者[Hörender]」はパウル・クレーである。『芸術作品の根源』においては、いまだ芸術作品というものが問題となっていて、たんなる物と芸術作品の違いとは何かが問われていた。芸術作品によって存在の真理が明るみに出されるのである。しかしながら、後期ハイデガーは存在と存在者の存在論的差異そのものを乗り越えようとするのであり、存在者や対象から「存在」そのものを思索することを徹底的に拒否しなければならない。存在者や対象からではなく「芸術作品の根源」を問わなければならないのだ。ギュンター・ゾイボルトによると、ハイデガーはクレーに関する覚書を残しており、そこでクレーについてさまざまな言及がなされている。それによれば、これまでの芸術も、当時最先端の芸術も否定されており、クレーだけがまさにピュシスそれ自体によって可能になるような芸術を創造しているとして肯定されている。

存在論的差異の乗り越えは、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性から思索することによってなされる。それは、よく~~「存在」~~といった十字抹消された形で表現される。大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性が変化した、まさにその瞬間的な場（一重襲）から、存在と存在者の二重襲という明るみにだされつつ隠れるという差異化の運動が生じる。十字抹消は存在

そのものが隠れ続けるということとともに、その瞬間的な場から新たな枠組みにおいて、十字から延びるように大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性が生じてくることを表しているのである。それと同じようにハイデガーは、「~~芸術~~」といった形で十字抹消された芸術こそが、まさに存在も対象もなしに「存在」を表現することを試みることでありとしている。したがって、ハイデガーは、「まだなお〈作品〉は存在しうるか？あるいは、芸術は他のものへと使-命を帯びているのであろうか？」と記す。おそらく、ハイデガーは作品なしに、いかにして関係性そのものから、「存在」を表現するかを思索していたのであろう<sup>32</sup>。

クレーの作品には、「現前するものや「対象」は描かれておらず、そこには形象といったものすらなく、まさに「状態」としか言いようのないものであるとされている。ハイデガーにとって、クレーはまさに「沈黙の声[Stimme der Stille]」を聞く「傾聴する者」である。「沈黙の声」とは、「四方域を接合し-働かせつつ、畳みこみ-展開させつつ、脱生起させ-生起させつつ隠すこと」のできる差異化の働きであり、それ自身をわれわれは見ることはできない。それはまさに、われわれが「聞こえること」、「見えること」、「言われること」を可能にしている、「聞こえないもの」、「見えないもの」、「言われないもの」なのだ。ある一つの「根源」から抜け出て、その「根源」を生じさせる働きそのものを表現するには、詩作的に思索するしかない<sup>33</sup>。

クレーは「芸術は見えるものを再現するのではなく、見えるようにするのである」と述べている。芸術のあり方は、生じてきた思考の枠組みにしたがって、さまざまな概念によって規定されてきた。しかしながら、それは全てある一つの枠組みのなかでの「聞きかた」、「見かた」、「言いかた」であり、いまだかつて枠組み自体を超えて、「聞きかた」、「見かた」、「言いかた」を拡張しようとしたものはいなかった。ドゥルーズが言うように「言語活動の限界、それは唾の状態におかれた〈物〉—<sup>ヴィジョン</sup>幻視—である<sup>34</sup>」。それは、「聞こえること」、「見えること」、「言われること」を可能にしている、「聞こえないもの」、「見えないもの」、「言われないもの」である「沈黙の声」を表現しようとすることであり、そのためには作品なしに、いかにして関係性そのものから、「存在」を表現するかを思索しなければならないのだ<sup>35</sup>。

## 5. おわりに

本論文ではまず、後期ハイデガーが存在論的差異の乗り越えのために、存在者や対象からではなく、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもの関係性から、存在を思索していたことを明らかにした。四方域はそれぞれ、さまざまなものが生きる大地、天候の変化である天、宗教や伝統・文化を司る神的なものたち、人間である死すべき者どもを意味する。〈物〉は、大地、天、神的なものたち、死すべき者どもについての関係性の枠づけとして、ある瞬間的な場において機能するのだ。そして、四方域が結びつけられて、ある一つの思考の枠組みが生じる。そこでは主体が対象を思考するといった形ではなく、存在の真理が生じる出来事が「観取[Erblickung]」される。〈物〉が枠組みとして機能するたびごとに、質的な意味や価値を持った時空間が生成してくるのであり、ひとつひとつの枠組みが「根源」であり、どの枠組みも中心になることはできない。そして、「根源」そのものを生じさせるような働きは、パウル・クレーのように作品なしに、関係性そのものからしか表現できないのである。「芸術作品が由来する領域」は、そのように詩作的にしか思索されないのだ。

## 註

- <sup>1</sup> ハイデガーのテキストからの引用は、以下の引用略号を用いて頁数を示し、その後に日本語訳の頁数を示す。  
IA: *Identität und Differenz* (『同一性と差異性』)  
BP: *Beiträge zur Philosophie : vom Ereignis* (『哲学への寄与論稿 (性起から [性起について])』)  
VA: *Vorträge und Aufsätze* (『建てる 住む 思考する』, 「物講演」, 「技術への問い」)
- <sup>2</sup> これからさらに見ていくように、ハイデガーの時空間はトポロジー的であり、質的な意味や価値を持ち、絶えず変容するものである。
- <sup>3</sup> IA, p.9, 日本語では, p.5
- <sup>4</sup> 本稿では、ハイデガー的な意味での物のあり方をするものについては「〈物〉」、通常の意味での物のあり方をするものについては物、あるいは「『単なる物』」と記述する。
- <sup>5</sup> VA, p.159, 日本語では, p.8
- <sup>6</sup> VA, p.159, 日本語では, p.7
- <sup>7</sup> VA, p.159, 日本語では, p.8
- <sup>8</sup> VA, p.159, 日本語では, p.7



9. IA, p.13, 日本語では, pp.10~11
10. IA, p.10, 日本語では, p.6
11. 「我々の思考は、物の本質をあまりに貧しく見定めることに昔から慣れている。このことは、西欧の思考の経過のなかで、知覚可能な特性の付着した未知の X として物を思い描く、という結果を招いた。こうした見地からすれば、当然ながら、集わしめる、というこの物の本質に属するものすべては、事後的に解釈へと持ち込まれた付け足しである、と我々には思われる。」 VA, p.148, 「建てる 住む 思考する」, p.138
12. VA, p.20, 日本語では, pp.26~27
13. 「知覚、すなわち知覚したり知覚されたりするのは現象であって存在ではないのに対し、〈存在〉は思考なのである。」ドゥルーズ, 「ハイデガーの知られざる先駆者, アルフレッド・ジャリ」, p.184
14. BP, p.344, 日本語では, pp.372~373  
 ここでの「本質現成[Wesen]」は動詞的に用いられており、ある枠組みの中においては純粹に動詞的な活動のみが生じている。しかしながら、枠組みが固定化されてしまうと、実詞にこの動詞的活動が従属して、主体と対象といった関係が生じてしまうのである。
15. BP, p.349, 日本語では, p.378
16. ドゥルーズ, 「ハイデガーの知られざる先駆者, アルフレッド・ジャリ」, p.186
17. 『地上における』とは既にして『天の下に』ということである。両者は「神的なものたちを前にして留まること」を共に意味し、「人間どもが共にあることへと属しつつ」そうするのであることを含む。ひとつの根源的な一性ゆえに、大地と天、神的なものたちと死すべき者どもという四者は一つに属する。」 VA, p.143, 「建てる 住む 思考する」, p.133
18. 「物たち[Dinge]のもとでの滞在が、四方域の中に四重のありかたで滞在することが、その都度一性をなすように成し遂げられる唯一の仕方なのである。住むことは、四方域の本質を物たちの中へともたらずことによって、四方域を保護する。」 VA, pp.145~146, 「建てる 住む 思考する」, pp.135~136
19. VA, pp.148~149, 「建てる 住む 思考する」, pp.138~139
20. VA, p.151, 「建てる 住む 思考する」, p.141
21. VA, pp.149~150, 「建てる 住む 思考する」, pp.139~140 を参照せよ。
22. BP, p.377, 日本語では, p.407
23. 「時間-遊動-空間[Zeit-spiel-Raum]」とも表現される。
24. BP, p.354, 日本語では, p.383
25. 「空間と時間は、それぞれが独立に表象されて普通の仕方で結びつけられると、それ自体が時-空に源を発するものとなる。その時-空は、空間や時間それ自体よりも根源的であり、また空間と時間を計算的に表象して結合させることよりも根源的である。しかし時-空は、生起としての存在のという意味での真理に属している。」 BP, p.372, 日本語では, p.402, あるいは, BP, pp.377~378, 日本語では, p.407 を参照せよ。
26. IA, p.23, 日本語では, p.23
27. VA, p.22, 日本語では, p.31
28. VA, p.28, 日本語では, p.40
29. VA, pp.26~27, 日本語では, pp.36~37
30. VA, p.15, 日本語では, p.17

31. 「ひょっとすると、いまだ思索されないままのア - レーティアの秘密へと目配せすることは、同時に、芸術の由来の領域を指し示すのではないか？ この領域から作品を生み出すことへの語りかけが到来するのではないか？ 作品は、作品としては、人間の意のままにならないもの、それ自体を伏蔵するもの[Vorbergen]を指し示してはならないのか？ すでに知られ、熟知され、行われていることだけを語らねばならないのか？ 芸術作品は、それ自体を伏蔵するものを黙殺してはならないのではないか？ そのものこそ、それ自体を伏蔵するものとして、計画も制御も、計算も製造もなされえないものに直面して人間に畏怖の念を起こさせるのである。」ハイデガー「芸術の由来と思索の使命」, p.204
- 「産業社会の世界はサイバネティックの世界となりはじめているが、この産業社会の内部で芸術はどうなっているのだろうか？ 芸術が訴えることは、この世界のなかでのこの世界のための情報の一種となるのだろうか？ 芸術を生み出すことを規定するのは、産業的な規制循環とその恒常的な遂行可能性との過程性格を充たすことなのだろうか？ もしそのようであるなら、作品はなお作品でありうるのだろうか？ 作品の現代的な意義は、つねに自分をただ自分自身からのみ調節し、そのようにして自分自身のうちに閉じ込められているような創作過程の連続的な遂行のために、あらかじめすでに時代遅れになることではないのか？ 現代芸術は、産業社会と科学的 - 技術的世界との規制循環のうちでの、一種の情報のフィードバックとして出現するのだろうか？ さらに、さまざまに名づけられる『文化事業』はここから正当な理由づけを引き出すのだろうか？」ハイデガー「芸術の由来と思索の使命」, p.199
32. ギュンター・ゾイボルト、「ハイデッガーの遺したクレーに関する覚書」, p.180
33. Ibid, p.183
- クレーは、「芸術作品もまず第一にゲネシス（発生）として捉えられねばならない。芸術作品を完全な姿で提出された制作物と受け取ってはならない」（『造形思考』p.126）と述べて、「作品の自然性[Natürlichkeit des Werkes]」「新しい自然性[eine neue Natürlichkeit]」について語っている。ハイデッガーとクレーは、ビュシスそれ自体によって創造されるような芸術を思索しているのだ。これに関しては、加國尚志の「私はこの世ではとらえられない」を参照せよ。
34. ドゥルーズ、「ハイデッガーの知られざる先駆者,アルフレッド・ジャリ」, p.195
35. 丹生谷貴志は、ハイデッガーの技術に対する考え方を以下のように述べている。「……源初（？）に置かれたニンゲンというテクノロジーを現存在の表層に再度可視化し可聴化すること。今やテクノロジーが地球を覆ったというのが本当ならば、そのことはしかし、地球がニンゲンのテクノロジーの支配下に置かれ道具化されるにいたったことを意味しはすまい。そうではなくて、地球全体が、地球という身体の表層にぴったりと張りついた源初的な身体テクノロジーの軋みそのものとなったことを意味するのだ。」それは、「ものの表層と最低のテクノロジーが厚みなくぴったり重なってしまったかのように出会う場所」であり、「見ることの能力を一瞬失うことであり、」「その作業は絶え間ない盲目と文盲が交錯する営みなのである。」丹生谷貴志, pp.206-209
- ハイデッガーは、「自由の本質は、根源的には、意志に割り当てられるのではないし、ましてただ人間的な意欲の因果性にだけに割り当てられるのではない VA, p.28, 日本語では, p.40」と述べている。ハイデッガーにとって自由とは、「聞こえること」、「見えること」、「言われること」を可能にしている、「聞こえないもの」、「見えないもの」、「言われないもの」である「沈黙の声」を思索し、表現することである。われわれの経験の仕方は、ある一つの枠組みによって規定されてしまう。ある一つの枠組みは、ある

一つの「聞きかた」、「見かた」、「言いかた」であり、経験の条件となるものである。ハイデガーの自由とはそれらを可能にしている領域を問うことなのだ。

### 参考文献

- ジル・ドゥルーズ、「ハイデガーの知られざる先駆者、アルフレッド・ジャリ」、『批評と臨床』守中高明，谷昌親，鈴木雅大訳，河出書房新社，2002年
- ギュンター・ゾイボルト，「ハイデッガーの遺したクレーに関する覚書」，宮島光志訳，『ニーチェ 実存思想論集IX』，理想者，1996年
- 加國尚志，「私はこの世ではとらえられない-クレーをめぐるメルロ=ポンティとハイデガー」，ハイデガーフォーラム第5回大会，2010年，  
<http://heideggerforum.main.jp/ej5data/kakuni.pdf>
- パウル・クレー，『造形思考 上』土方定一他訳，新潮社，1973年
- マルティン・ハイデガー，『同一性と差異性』大江精志郎訳，理想社，1969年
- Martin Heidegger, *Identität und Differenz*, Klett-Cotta, 2008年
- マルティン・ハイデガー，『ブレーメン講演とフライブルク講演』森一郎，ハルムート・ブフナー訳，創文社，2002年
- マルティン・ハイデガー，『哲学への寄与論稿（性起から〔性起について〕）』大橋良介，秋富克哉，ハルムート・ブフナー訳，創文社，2005年
- Martin Heidegger, *Beiträge zur Philosophie : vom Ereignis*, Frankfurt am Main : V. Klostermann, 2003年
- マルティン・ハイデガー，「建てる 住む 思考する」大宮勘一郎訳，『ハイデガー 生誕一二〇年，危機の時代の思索者』，河出書房新社，2009年
- Martin Heidegger, *Vorträge und Aufsätze*, Klett-Cotta, 2009年
- 丹生谷貴志，「「良心の呼び声」の余白に」，『現代思想 5月臨時増刊号 ハイデガーの思想』，青土社，1999年